
閉ざされた校舎(ほぼ台詞のみ)

中居忠彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閉ざされた校舎（ほぼ台詞のみ）

【ZZード】

Z 2 3 4 8 X

【作者名】

中居忠彦

【あらすじ】

いつの間にか学校にいる冬木宗治……

帰ろうとするも、校舎から出る事が叶わない

誰も居ない校舎

宗治はとにかく、校舎からの脱出を図るが.....

実験作品、その1

第1話・閉ざされた校舎

冬木宗治「俺、何で土曜日に学校にいるんだろ」

冬「時間は……3時半か。何故学校にいるか理由は分からんが、まあ、いいや……帰る」

一階、昇降口

冬「よし」

グツ、ガチャツ

冬「…………閉まってる。土曜だからか? ついつても、部活してる連中とかだって…………いない。」

冬（ひょっと妙だけど…………、とつあえず今度は裏口回つてみるか）

一階裏口

ガチャガチャツ

冬「…………裏口ついて、土曜日も閉まってるもんか? 来客だつてあるだろ?」

一階資料室

冬「失礼しまーすつ」

冬（職員室も誰も居ない……いくらなんでも無えだろ、この展開）

二階資料室「失礼しまーすつ、火野せーん？」

冬（いない、アテにはしてなかつたが……他誰か居ないか探し
てみつか。でなきや入り口閉まってるんじゃ いつまで経つても帰れ
やしない……）

1時間後

冬「…………あれからあつひゅーひひひ歩き回つたが、人1人見当たらねえ。どうなつてんだ、一体…………母さんこ帰り遅くなるつてメールでも入れ…………え？」

携帯時刻3時30分332秒

冬「俺が時間確認した時と時間が変わってない？」

？「おーい、宗治ーー！」

冬「つー？」

夏希蒼麻「宗治つ、良かつた…………お前もいたんだな…………」

冬「蒼麻つ、何でこりんなとこいんだよ？」

夏「それは俺も聞きたいよ、何でお前が土曜に学校いるんだー、とか、どうじて俺土曜に学校いるんだーって」

冬「…………お前もこつ学校來たか解らないのか？」

夏「ああ、何でこりんだろつて、せつかからずつと…………つて、宗治もかつ？」

冬「気付いたら学校にいた」

夏「俺も。んで帰るついで昇降口行つたり裏口行つたりしたんだけど、鍵掛かって出られなくてさ。職員室行つて誰かに開けてもらおうとしたんだけど、誰もいない……だから、火野先生ならいるかな?って思つて探してたら、お前見つけたんだ」

冬「そりが……俺とほとんど一緒に」

夏「宗治も?」

冬「俺は火野さん探したがいない…………で、取り敢えず1時間くらい本館の方手当たり次第探したが、ひの字も見当たらん…………てどこでお前に会つた訳だ」

夏「そうだったんだ……」

冬「そうだ……、蒼麻携帯見せてくれねーか?」

夏「?」

第2話・食い違ひ時間

冬「そりだ……、蒼麻、携帯見せてくれねーか?」

夏「?」

冬「いいから

夏「よく分かんないナビ、はー。」

冬「サンキュー、4時02分、……なるほどな、返す。後でもつかい見せてくれ。」

ヒロ

夏「おひと。どうしたんだ、宗治も携帯持つてるよな?」

冬「ああ。おひと気になつた事があつてよ。俺も、3時30分から学校出立としたんだ。」

夏「…………うそ。」

冬「やつをも言つた通り、1時間は歩き回つた。で、やつをお前に会つひよこと前に携帯で時間確認した。」

夏「…………それで?」

冬「…………見てみ。」

ヒュウ、パシツ

夏「…………え？」

3時30分32秒

夏「お前、本当に1時間…………？」

スツ……

冬「ほんと1時間だ。移動中時間確認しながら動いてた訳じゃないが、間違いない」

夏「…………」

冬「蒼麻。お前、学校にいるつて気づいたの、何分くらい前だ？ 感覚でいい。」

夏「…………多分、30分くらい。」

冬「予想だが、お前の携帯も、時間が動いていないかもしれん。」

夏「つー?」

冬「確証は無いが、調べられるな。蒼麻、取り敢えず2、3分くらいいしてからもう一度携帯開くぞ。」

夏「…………分かった。」

3分後

冬「…………そろそろか、開くぞ。」

夏「うん……。」

3時30分32秒

4時02分

冬「…………決まりだな。」

夏「嘘だろ、何で……。」

冬「分からん、とにかく…………もう一つ調べたい事がある、そっちに行くぞ。」

夏「…………。」

冬「よし、着いた。」

ガラツ

夏「何で一年の教室なんか……」

冬「田の前だつたしな。さて……」「

チラツ

夏「何見てるんだ?」

冬「…………時計

夏「何で?」

冬「…………何か解りそつて、更に解らなくなつたな。」

夏「へつ?」

チラツ

夏「…………どうなつてんだよ、コレ。」

6時47分50秒

冬「.....」

3時32分32秒

夏「.....」

4時02分

夏「.....携帯が調子悪いのかな。」

冬「電波修正入るだろ、普通は.....百歩譲つてそうだとしても、一番大きな問題の答えにはなってない。」

夏「.....。」

冬「俺達がいつににに来て、何でこんな、誰もいない学校に閉じ込

められてるかだ。

「

第3話・食い違つ時間2

冬「俺達がいつここのに来て、何でこんな、誰もいない学校に閉じ込められてるかだ。」

一階2 D

冬「…………

夏「…………

冬（あれから俺達は、自分達の教室に戻った。そのまま一年の教室にいても構わなかつたが、自分達の教室のが落ち着くからという理由からという事で戻る事にしたのだ。）

送信先 母

ピッ

送信エラー 送信できませんでした

送信先 父

ピッ

送信エラー 送信できませんでした

冬（…………結局、この異様な状況下で家に連絡入れんのすっかり忘
れてたが、やつぱり外部に連絡すんのは無理か。期待してなかつた
分、そこまで俺には堪えないが…………。）

チラツ

夏「…………」

冬（蒼麻の奴は完全に参ってるな…………。つづてもさすがにこの状
況は俺にも…………。）

ピッ

3時30分33秒

冬（…………時計が一秒だけ進んでる？…………もつー度、家に連絡入れてみるか。）

送信先 母

ピジ

送信工マー 送信できませんでした

冬（やつぱ無理か…………、なーり。）

発信先 家

ペジ

冬（浮び出しそう一つならない。）

チラッ

夏「…………」

冬（やつこや、外部は無理だったが、内部はどうなんだ……。試し

てみるか)

発信先 夏希蒼麻

ピッ

..... プッ プッ プ

冬(繫がつた。ああ、どうなる?)

ピココココココココリッ!

夏「うわっー?」

ピココリリリ、ピッ

夏「はーーもしもしーー?」

冬『内部なら繫がるみたいだな。』

夏「つて、宗治!/?つまらない[冗談やめりよー]」

冬『そんなじんよりオーラ延々と横で吐き出されてたりひたちも戀^{ハシ}になるわ。』

夏「うぐう。」

冬『んな事より、一旦切るから、今度そっちからかけ直してくんねーか?』

夏「はつ? 何で? ?」

冬『いいから。』

ピッ

シバ。シバ。シバ。シバ。

夏『一体何したいんだよ……。』

冬『分かった、サンキューだ蒼麻。』

ピッ

冬(やつぱり、外部は無理だが内部はこける。つー事は、アレ試す
価値ありだな。)

第4話・食いで違う時間3

冬（やつぱり、外部は無理だが内部はこかる。つい事は、アレ試す
価値ありだな。）

夏「一体、何なんだよ。」

冬「…………ある仮説と、試したい事がある。」

夏「どんな？」

冬「正直などいふ、根拠の無い話になるが、それでも聞くのか？」

夏「ああ、こんな変な状況なんだから、ぶつ飛んだ話になつても、
驚いたりはしない…………たぶん。」

冬「…………恐らく、これは俺達がいつも来てる学校じゃない。」

夏「…………は？」

冬「どうこう仕掛けかは知らない。ただ、いつも来てる学校ではな
こと細かい。」

夏「…………。」

冬「俺達さ、携帯の時計が違う時間指してるだろ？学校の時計も、俺達の時計のどれとも合わない。ここに来てただろう時間を考えて計算しても、だ。」

夏「…………確かに。」

冬「たぶん、俺達は何かに、ここに連れてこられた。それも、バラバラの時間か。」

夏「バラバラの時間？」

冬「ああ。これも何故かは知らないが、俺達がここに来ただろう時間は、同じではない。俺からしたら今のお前は、ほんの少し未来のお前だし、お前からしたら、俺は少し過去の俺になる。」

夏「何で……？」

冬「だから、それはわかんねえよ。敢えてそうしたのか、或いは、何らかの事が原因で、同じ時間に俺達をここに放り込めなかつたのかもしれないし……」

夏「…………。」

冬「それと、あくまで仮説の上の話だが、こっちではもう2時間近く時間食ってるが、恐らく、俺達が本来いる場所での時間は1、2秒くらいしか経つてないはずだ。」

夏「どうこいつ事なんだ？」

冬「…………」れ、携帯の時間見てみ。」

夏「変わつてないんじや…………ひ。」

3時30分33秒

冬「変わつてんだ、1秒だけ。」

夏「でも、たつたの1秒だろ？何かの拍子に。」

冬「そうかもしない。言つたら、仮説なんだ。根拠なんてまるで無い。でも、有り得るとも思つてるんだ。こんな状況なんだから。信じなくても、いや、聞き流しても構わない。」

夏「…………。」

冬「自分で言つても信じらんないんだ。何ファンタジー語つてるんだ、って思つてるんだ。でも、そう考えたくなるくらい、異常な状況なんだから、そう考へても有りかな、つてな。」

夏「…………少し、時間をくれ。」

冬「構わない。もう少し調べたら、何か出るかもしれないんだ。こんな根拠の無い仮説よりも他に信用できる情報が入るかもしれないんだからな。」

夏「.....」

冬「で、だ。一つ、試したい事がある。それは.....」

第5話・夏希蒼麻

夏「…………。」

夏（恐るべしにせ、俺達がこつも来てこりの学校じやない、か……
…。）

冬「ん、じつした、蒼麻？」

夏「ああ、『めん。何でもないよ。』」

冬「そつか。」

夏（少し時間をくれ、と言つてしまつたけど、何となく宗治の言つ
てるのを殆ど間違いない様にも思えてくる。）

夏（だつて、状況からして怪しいじゃないか。この学校の時計の時
刻はもう7時回ってるのに、何で外はこんなにも明るいんだ？）

夏（加えて、携帯……外部には繋がらない、時間がほぼ動いてな
いつて事以外じゃ、携帯は普通に動いてる。）

夏「…………。」

夏（どうして、校舎内部だけには通じるんだろう。それこそ、何でいきなり宗治の携帯の時計は一秒だけでも動いたんだろう。）

夏（やっぱ、ここは俺達がいつも来ている学校ではないんだろうか、じゃあ、これは何処なんだ……いや、それ以前に……。）

夏（誰が、もしくは何が一体何の目的で、俺達をこんな所に閉じ込めたんだろうか……。）

第6話・新たな仲間

冬「で、だ。一つ、試したい事がある。それは……」

冬「…………高遠先輩も椿先輩も駄目、か。里桜も出ない、紅師も…………。」

夏「須藤、駄目。芦屋、駄目。…………柳に櫛那もか。」

冬（内部にいる奴には通じるつてのは分かつたから、電話をかけて繋がる奴と集まってみるつて作戦を思い付いたはいいが…………やはり簡単にはいかねえか…………。）

冬「ん、どうした、蒼麻？」

夏「ああ、「じめん。何でもないよ。」

冬「そうか。」

冬（蒼麻は蒼麻で、現状整理をなんとかしてるつて顔か。まあ、わからぬ事だらけだし、とにかく使える手は全て使つか…………。）

The figure is a scatter plot with the x-axis labeled 'N' and the y-axis labeled 'M'. The x-axis has major tick marks at 10, 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, and 100. The y-axis has major tick marks at 10, 20, 30, 40, 50, 60, 70, 80, 90, and 100. There are approximately 20 data points represented by black dots. The points generally follow a linear trend from the bottom-left to the top-right, with some deviations. Notable points include (10, 10), (20, 20), (30, 30), (40, 40), (50, 50), (60, 60), (70, 70), (80, 80), (90, 90), and (100, 100).

冬（もう大分、アドレス帳ん中虱漬しにかけまくつたから、流石に
もう少なくなつてきたな……、残るは……部活メンバーか。）

上山
浩平

ピッジ

ଶିଖାଶିଖ

冬「……繫がつたつ。」

夏「誰に！？」

「……………。ひ。」
「……………。ひ。」

ラ・シ・ラ・シ・ラ

上山浩平『もしもし。』

冬「よつ、冬木だ。」

上』冬木、マジでか！？』

「冬」「ああ、マジだ。今何処にいる。

上『あ、ああ……何かよく解らないんだけどよ、いつの間にか学校にいて……。とりあえず、今は職員室にいるんだ。』

「着ぐ。

上『分かつた、すぐ来てくれよ。氣味悪くて恐え——よ……』。

冬「赤い絵の具被つて血まみれ装つて行つてやるな。」

上『黒髪な上作しなこでせぬ来こよー?』

冬、「わーった、わーった。じゃな。」

冬「今、職員室にいるから、行くぞ蒼麻。他の連中への電話は後でいい。」

夏「なあ、浩平の奴ももしかして……」

冬「状況俺達とおんなじでまるで分かつてないみたいだったしな。たぶん俺達と同じ状況だ。」

夏「じゃあ、今は仲間が増えたの喜ぶべきかな。」

冬「ああ、そうだな。」

第7話・新たな仲間 2

夏「じゃあ、今は仲間が増えたの喜びべきかな。」

冬「え？ 何が？」

— 踏職観察 —

冬「上庄。」

上「冬木！ それに夏希もいそじやんー。？」

夏「ああ。俺達は随分前に合流出来てさ、ずっと一緒にいた。」

上「何でちよ、これでちよと仮が楽になるよな？」

冬「ああ。ヤバい状況になつたら上山島代わりにして逃げられるし

な。」

上「お前に俺、何なんだい？」

冬「保険。」

上「てめえつ……」

冬「冗談だ。それより、お前、どうから来た？」

上「え？ あ…………何かいつの間にか別館の一階の体育館への渡り廊下にいてや。帰るーと思って一階の昇降口行ったら閉まってて、それで…………。」

冬「色々やつてたら職員室まで来て、そこで俺達から連絡来たと。」

上「そなんだよ。携帯も通じないし、携帯の時間は変な時間になつてるし。」

冬「ちよーい携帯見せてみ。」

上「ほー。」

冬「…………。」

夏「俺達より時間早いね。」

冬「ああ、つい事はだ。あまつこの時間にじだわる必要ないだろ。」

夏「あんまり意味ないみたいだね。」

上「…………やつきかひ、何の話してゐるのかな。」

冬「一応聞いてとくか…………。上止、学校にこるのって気がいたの、今からじんぐりい前だ。正確じゃなくていい。」

上「あ？あ…………20分ぐらいい前じゃないかな。」

冬「なるほひ、時間にじだわっても意味がないのは間違いない。こ
うもバラバラならな。」

上「あのー…………、そろそろ何の話か教えてくれても…………」

冬「ん？ああ、すまない。実は…………。」

上「…………マジでか。」

冬「今のところ、これといった確証は無いんだがな。だが、この異
様な状況を考えると、そういう事でも可笑しくないと、俺は思う。」

上「…………。」

冬「蒼麻にも言つたが、聞き流してもいい。恐らく、違うだろ？
か
う…………」

? 「いや、冬木。お前の言つた事が、現状出しつる答えで最も真
相に近いだろ？」

第8話・新たな仲間 3

? 「いいや、冬木。お前の言つた事が、現状出しうる答えで最も真相に近いだろ?」

冬「オッサン!？」

火野秋嗣「教師をオッサン扱いか……まあ、いいや。」

夏「先生も来てたんですか?」

火「夏希、お前は良い子だな。まあ、俺もいつの間にか……お前らの言う、居る事に気付いたつていう時間で言つと……大体4、5時間前かな。」

上「オッサン今まで何やつてたんだよ……。」

火「上山、お前は今期の成績全て一ずつ評価下げとくな。」

上「何で俺だけ!？」

冬「つーか、火野さんマジで何やつてたんだ?」

火「ああ、実はな……。俺はお前らと違つて、ここに来る前の記

憶がある。そのせいで、動くのが遅れちまつたのもある。」

夏「来る前の事、覚えてるんですか……。」

火「俺な、昨日夜はずっと別館の資料室で棚の整理とか全部やつてたんだが、途中で眠くなつてやめたんだ。どうせ明日土曜日だし、つて思つてそのまま資料室で寝て……。気づいたらこの学校にいた。」

冬「なるほど。つまり、日付またいで学校にいたから、それで気付くの遅かつた訳か……。」

火「そういう事。しかも、そつから資料整理再開したから、尚更ね。だけど、途中で嫌に静かなのに気付いて、お前らと同じで色々探つた……。で、今に至つたと。」

冬「ふむ……。火野さん、何でここがいつもの学校じゃないって気付いたんだ。さつきの俺の考え、普通に肯定してたし。」

火「ああ、それね……。」

チラッ

火「この時間に、ここまで明るいのは可笑しいだろ。もう8時すぎる。最初に見た時計が怪しいのかと思って教室片っ端から探つたが、ずれてる訳でもない。ここはいつも来ている学校では無いんじゃないか、と思い始めたつて訳。」

冬「火野さんはここ、何だと思つ?」

火「俺達がいつも行つてゐる方の学校の事を記録した日記か何か……。」

…………と、考えられもするな。」

夏「日記か……」

上「…………何か？」

火「例えば、ここはかなり細かく書かれた、尚且つ開きっぱなしの日記のページの中の世界。時刻は昼間だ。日記の中で時間がいくら進もうと、いや、まあ日記の中で本当に時間が進むのかは知らんが、まあ、進むとする。だが、そのページは昼間の火が照ってる時間帯にどつかに置かれてるから、結局いつまでも日が出てる訳だ。」

火「まあ、信用するしないは自由だが。」

第9話・新たな仲間4

火「まあ、信用するしないは自由だが。」

冬「状況が状況だ。信じるよ。まあ、もっとも…………。」

火「その予測は仮に当たっていても意味がない、と？」

冬「………… わすが火野さん、鋭いな。」

火「そうなると、冬木。自分の言つた事も意味がないって話になるのかな。」

冬「そうだな、意味がない。」

上「ちよつと待てよ。ここまで色々分かつたのに、なんで意味が無いんだよ。」

夏「ここがどういうカラクリで動いてるか分かつただけで、肝心の問題が一個も解決してないから、か？」

冬「ん。」

上「は？」

火「俺達の目的は、ここが何なのか?じゃなくて、どうひざひつていから出るか、だろ?」

上「あー…………。」

冬「俺達がこここの仕組みを推理したのは、ここから出る方法のヒントか何かが見つかるかもしない、と思ったからだ。だが、今分かつた事じや、何の役にも立たない。」

夏「…………振り出した戾つた?」

上「マジかよ…………。」

火「いや、そうでもない。」

夏&上「?」

冬「結局、今までの推測は無駄になつたが、閉じ込められた仲間を見つける事が出来た。」

火「4人もいるんだ。落ち着いて動けば、何かしら脱出する方法が浮かぶかもしだい。」

夏「…………。」

冬「それに、他に誰かいるなら、合流しないとな。」

チャラツ

上「携帯……………そうかっ。」

夏「確かに、戦力は多い方がいいね。」

冬「そういう事だ。さあ、探そつぜ。」

冬「他にいるかもしない仲間をな。」

第10話・火野秋嗣

火「ふむ……」

火（冬木達と合流出来たはいいが、どうするかね。）

火（もしここが、本か何かの世界だと仮定した場合、俺らを閉じ込めてる本を探しても意味がない…………。）

火（冬木もやっぱまだガキだな。そんな簡単に決めてかかるあたりは。）

火（取り敢えず、どつかしらで…………、あるかどうかは分からんが、外の世界で俺達をここに閉じ込めたであろう品を探すとするか…………。）

火（調べる価値は充分ある…………。ただ、問題はそれを見つけたはいが、オマケで何かくつついでいた時…………。）

火（ただの物言わぬ物が、何故俺達を閉じ込めたのか…………、恐らくは…………。）

火（俺達を閉じ込めた品の持ち主が、大きく絡んでいるのだろう。
そして、ここにいる俺達は、何らかの形で、それに関わってしまう
た……。）

火（だが、そいつは何時だ。俺達は、何に触れちまたんだ……
……。）

第11話・狂氣

* * *

冬「そういう事だ。さあ、探そうぜ。」

冬「他にいるかもしだれない仲間をな。」

シバヤシ・シバヤシ

タタキ「ひまつー？」

夏「……？」

火「…………冬木の携帯か。だが…………」

シバヤシ・シバヤシ

上「外からは繋がらないんじや…………」

冬「ああ……。それこそ相手は……。」

秋山蓮

火「蓮ちゃんじゃないか。」

夏「なあ、繫がつたつて事は……」

冬「マジかよ、中にいんのか……。」

火「マジックペーパー

冬「もしも……」

秋『おひそひそおおお——こいつ——』

冬「…………ぐつ。」

夏「…………宗治?」

冬「…………耳がいてえ…………。」

冬「いきなり叫ぶな、馬鹿女あつっ…………！」

秋『何ですってえつ…………つて、そつじやなかつた…………。あんた今何処にいんの？他に誰か近くにいる？』

冬「え？あ、ああ…………今たぶん学校だ。近くに蒼麻と上山、火野さんがいる。」

秋『たぶん学校つて…………まさかあんた達も誰もいない変な学校に閉じ込められてんの？！』

冬「もつて…………やつぱり先輩もかよ。」

秋『やつぱりつて…………うつて、後で聞くとして…………学校の何処？』

冬「職員室だ。」

秋『職員室…………、ぎつぎり撒けるかも…………すぐ行くから待つてー！』

ブツツ

冬「つ。」

火「切れたのか。」

冬「ああ。すぐ行くから待つてろ、って。それとさういり撒けるかもとか何か言つてたが」

夏「……………撒く?」

冬「何か言つてたんだが……何を撒くんだ?」

上「秋山先輩の事だから、めんどい話な気がする…………。」

冬「……………。」

冬（蓮先輩は明らかに慌てていた…………。撒くって言つてるあたり、何かから逃げている訳だが…………。何から逃げている?）

冬（明らかに悪い予感しかしないんだが…………。）

第1-2話・狂氣2

冬（蓮先輩は明らかに慌てていた。撒くつて言つてるあたり、何から逃げている訳だが……。何から逃げている？）

冬（明らかに悪い予感しかしないんだが……。）

10分後

上「…………嫌に遅くな？」

夏「別館からなら歩いてでも、職員室は10分もかからないはずだけど…………。」

火「冬木、蓮ちゃんは撒いてるって言つたんだったな。」

冬、「…………探していく。」

たつたつたつたつた

火「待て、
来たみたいだ。」

ガラツ

秋「はー、はー…………。やつと逃げられた…。」

冬「蓮先輩、よく分かんねえから、説明をしてほしんだが……。」

秋「はつ、はつ……ちょっと……待つて。」

卷之三

冬（蓮先輩が二〇〇〇まで息切れしながら逃げるつて、一体何があつたんだ……。）

秋「…………はー。うん、OKOK。じゃあね、…………。」

冬（蓮先輩も俺達と同じく、気付いたらこの学校の、俺達の部活動でもある演劇部の部室にいたらしい。学校から出ようとしたら、出られず…………といつのは、俺達と一緒になのだが…………）

秋「見た事ない制服の女の子がいて、話を聞こうとしたんだけど、明らかに眼がいつちゃってて、いきなり狂ったみたいに笑い出したから、逃げてたんだけど…………。」

冬「追いかけられたと。」

秋「そう、撒くのに必死だったわよ。」

上「なあ、それってわ……。」
火「…………。」

上「俺達、相当ヤバい状況じゃないの？」

第1-3話・狂氣③

* * *

上「俺達、相当ヤバい状況じゃないの？」

全「…………。」

冬（確かに、その話が本当なら、俺達はそこにつかまつたら相当やばいって話になる。だが…………。）

夏「…………でもわ、って事はもしかしたら、そこがこの状況の元凶なんじや……。」

冬「蒼麻…………。」

火「まあ、可能性としては有り得るわな。なんか、その女子生徒も聞いてる限りじゃ、まともじゃないのは確かだし。」

上「つむぎ、やこつをどうかしきゃええぜつ…………」

火「えりあわせ…………」

上「えりあわせ…………やつやそこつ捕まへんわ。」

秋「無理だと思つわよ。本当に普通の感じじゃなかつたし……。
近づきたくても恐くて出来たもんじゃないわ。」

冬「先輩が言つたのは相当だぞ、上山。俺達がどういつ出来る問題じゃない。」

上「…………そうだね。」

秋「ヒ・ツ・ギ・ヒ・ビ・ツ・ヒ意味かしら？」

冬「突つかかってきた不良10人數秒で全滅させる人間が言つんだ
から間違いない。」

秋「何でそんなこと知つてんのよ！？」

冬「ヒないだ見た。」

夏「そ、そんな事してたんだ……。」

秋「！」、ほん。ま、まあとにかく、そつこつ考へは無駄つて事よ。

「

火「お前は何いらん伝説を作つてるんだ……。」

秋「あう…………。」

冬（「冗談抜きに、先輩が逃げ出す様な奴が相手じゃ、ここにいる人間じゃ……」）

火「…………。」

冬（火野さんぐらいだろうが、正体不明な生き物であらうと幽霊だらうと何だらうと、女が相手じゃ手なんか上げやしない…………。実質、見たら逃げるしかないな。）

上「待てよ？先輩追つてきたのを撒いたんだよな…………。」

秋「まあ、確かに撒いたっちゃ撒いたわよ。簡単に見つかったらやばいから、三階あたりでうまく…………。」

カツ

冬（…………？今、何か…………。）

夏「…………先輩、それって本館の？」

秋「別館まで逃げようなんて、考える余裕なんて有るわけないでしょ？何とか撤いて合流しなきゃってのをギリギリ考えられるくら

いだつたんだから。」

カツカツカツ

冬（…………やはり、何か近づいて来てる。まさか……）

冬「みん…………」

火「全員、今すぐ伏せろっ。」

秋「まさか…………」

夏「こっちに来たつて…………」

上「え、何?」

火「いいから伏せろっ。」

全「つー?」

ガバッ

冬（火野さんも気付いてたか……。それも、普段めったに声荒げないのにここで声を荒げるとなると、相当警戒してるな……。）

カツカツカツカツカツカツ

夏「足音が聞こえる…………」

秋「…………近い。」

上「嘘だろ…………。」

冬&火「…………つ。」

カツカツカツカ

ガラツ

上「…………つ」

火「全員、音を立てるな、声も出すなよ…………。」

スツ…………

冬「…………。」

火「冬木、何やつてんだっ。」

冬「ここからなら、鏡で職員室の入り口が見える。見つからない様に様子を見るから、少し静かにしていてくれ。」

火「…………。」

冬（職員室の入り口からいくらか離れてるが、近付かれてきたら逃げるしかない。無駄にこここの職員室は広いんだ。逃げる時間は十分稼げる……。）

火 ハハハ

冬（…………いや、マジで普通の女じゃないな…………。）

第1-4話・狂氣4

冬（……………いつや、マジで普通の女じやないな…………。）

女「…………」

冬（充血したみたいに田^だが真つ赤に光ってる…………。）

冬（霧^{きり}囲^い氣^きからして近寄^{ちかづ}りたくて近寄^{ちかづ}れない感じだし先輩^{せんぱい}が逃^{のが}げる訳^{わけ}だ。）蓮

スツ

夏「…………どうだった？…………」

冬「……やばいな、一部除いて見た目は普通の人間なんだろうが、あらー田舎に逃げるわ。……」

秋「……でしょ?」

火「……冬木、場所変われ、覗いてみる。……」

冬「……ああ。……」

火「……。」

火「……本当にやばいな。……」

冬「……位置は?」

火「……恐らくお前が見た時まま、扉の前だ。……」

冬「……一気に奴のいない扉から逃げるか?」

上「……待てよ冬木つ、お前それはつ……」

火「……早まるな、いくらなんでも危険だ。捕まつたらアウトは間違いないが、そいつは最後の手段だ。こつちに気付いたら逃げる。向こうが去るかもしれん、待とう。……」

夏「……宗治、焦る気持ち解るけど、今は……」

冬「……解つてゐ、悪かつた。……」

秋「……先生、そのまま見張りお願い。……」

火「……了解だ。……」

30分後……

火「……まだ動かない。……」

冬「……こつちにいるの氣付いてるのか?」

秋「……でも、そしたら何でこつちに来ないのよ?」

冬「……敢えてこつちが出てくるのを待つてゐるのか?」

火「…………状況は動かないか…………。みんな、走れる準備だけでもしろ。」

冬「…………強行突破か?…………」

夏「…………。」

火「…………お前らが逃げられるくらいの時間は稼ぐ、俺の心配はするな。考えがある。…………」

冬「…………分かった。…………」

上「…………冬木つ。…………」

冬「…………火野さんに嘘つかれた事はない。この人が本当に危険だと感じたら、動かないさ。…………」

火「…………そう言つ事だ。カウントしたら走れ、いくぞ。…………」

火「…………5…………」

上「…………。」

火「…………4…………」

秋「.....」。

火「.....3.....」。

夏「.....」。

火「.....2.....」。

冬「.....」。

火「.....1つ、.....」。

第15話・狂氣5

大
大
大

火「」、1つ、
全「」、つ。
「」、

女「つ」

カツカツカツカ

火^一
行つたのか?」

「うひーな……。」

夏「でも、今の非常ベルだよな？」

上「まさか……？」

秋「私達以外にも、誰かいいるのかな？」

冬「…………たぶんな。ただ、非常ベルなんて、誰か押さなきゃ鳴らないんだ。いるんだろうよ。」

火「問題は、それが二つとも側か向い側なのか、ってところね…………。」

上「？」

火「あんなのが出てきたんだ。もう一人いてもおかしくないでしょつての。」

秋「あんまり考えたくないわね…………。」

冬「とにかく、今の内に出よう。また戻つてこられたら田もあてらんねえ。」

夏「そうなると、アイツが行つたルートとは反対側に行かないと駄目か……って事は。」

火「たぶん……今、非常ベルが鳴つてるのは、美術室方面のだと思つぞ、音のデカさからして。」

冬「そうなると…………」の際別館に抜けるか。部室なら、あそこは準備室もあるから、逃げられるし…………。」

秋「最悪、アレもある?..」

冬「使いたくないが、可能性に入れるしかないな。」

上「なあ、戻つてくる前にやつたと移動しね?..」

冬「そうだな…………」これはコイツのヘタレ思考を尊重し…………

上「誰がヘタレだ!-?」

火「結局、非常ベル鳴らした奴には会わないまま、と……。」

冬「誰が鳴らしたんだ……？」

夏「逃げる時間稼げたのは確かに助かったけど……」

全「…………。」

冬「取り敢えず、こつから先どつするか考える。まだ何も解決してねーし……。」

夏「むしろ、悪化してる気がする…………。」

第16話・夏希蒼麻2

夏（もう、どうも悪い感じで事態は最悪だと思つ……。）

夏（この学校の仕掛けは、まだ仮説でしか解らないままで、何で閉じ込められているかも解らない……。）

夏（しかも、それが何一つ解決していないだけじゃなく、俺と宗治以外にも三人もいる……。）

夏（加えて……職員室で見た……、アイツは何なんだろう。）

夏（そういうば、俺達の他にも誰かいるっぽいし……）

夏（誰なんだろ、一体。）

火「…………つていうか今思つたんだが、ここにいるのって、みんな演劇部部員だな。」

夏（つ！？）

冬「…………ああ、偶然にしちゃ出来過ぎだな。」

夏（言われてみればそうだ。ここにいるのは、みんな部活メンバー
じゃないか。火野さんだって顧問だし……）

夏（もしかすると、もう一人いるかもしれない奴も……）

夏（だとすると、ここにいない面子は2人だけだけど……）

夏（もし、あの人なら、早めに探さないとまずいかもしない。あ
の人もあの人で、ほつとくと面倒な事になりかねないしな……。）

第17話・偽りの終焉

夏「むしろ、悪化していく気がする。」

冬「確かに、正直みんなのが出るとほ思わなかつた。」

火「長居は出来なくなつたわな、確實に。」

夏「うん。」

上「……。」

秋「……。」

冬「取り敢えず、みんな各自で休んでいいはず。色々考えたい奴もいるだらう。」

秋「うめん、やつせてもううわ。」

上「俺もうひとつ。」

冬「蒼麻、お前も休め。顔色悪いから。」

夏「うん……。」

火「みんな、やっぱ相当疲れてるな……。」

冬「…………。」

冬（もつ、この異様な状況にみんな流石に疲れてきたみたいだな。
無理もねえが……）

火「少し、状況整理といぐか……」

冬「…………ああ。」

火「俺達は、いつの間にかいつも来ている学校によく似た学校にいる、脱出方法は現段階では無し。」

火「時間もよく解らない、外は一体どうなっているのか、それも解らない。」

火「挙げ句の果てには謎の女子高生、捕まつたら相当ヤバそうな雰囲気。」

冬「あれはないな……。」

火「もう、恼みのタネだけで、頭痛いわ、マジ。」

冬「アンタのその様を見ると、そりは思えなこよ。」

火「表に出さない様にしてるだけよ、仮にも担任で、こざという時にお前ら守らないといけないのに、不安丸出しなんてする訳ないだろっての。」

冬「まあ、な……。」

火「つと、話が逸れた。そういうや、あの時の非常ベル鳴らしたの、出てこないな。」

冬「ああ、あれなきや本当にヤバかったんだ、見つけたら礼べりい言わないとな。」

火「ふつちやけ、そいつが味方で、お前らみたいこ……」

冬「どうした?」

火「…………っていつか今思つたんだが、ここにいるのって、みんな演劇部部員だな。」

冬「…………ああ、偶然にしけや出来過ぎだな。」

火「もしかすると、非常ベル鳴らしたのも、演劇部部員かもよ。」

冬「そうかもな。ただ……」

火「ん?」

冬「何で演劇部の奴だけここに閉じ込められてんだ

火「……………言われてみりやそりだ、何かこんな目に会ひよつた事したつけな……………。」

冬「……………。」

（したか？こんな事になるような事を……………備品なんか壊した覚えもないし、怪しい場所に行つたりもしてない。）

冬「火野さん、心当たりは……………」

火「……………ある。」

冬「マジかっ！？」

火「恐らくそれだろうという憶測だが……………」

冬「何でもこいつ。」

火「……………日記帳だ。」

第1-8話・偽りの終焉2

火「…………日記帳だ。」

冬「日記?」

火「お前、昨日部室掃除したの覚えてるよな?」

冬「ああ、授業終わってからやったが…………日記なんて…………」

火「部室にある使わない台本と資料、整理してたろ。」

冬「…………あの中につ……?」

火「整理してる時、何らかの形で全員触れるなり中読むなりしたんじゃないかな?」

冬（そういえば、一度、上山の馬鹿がいるない台本とかを無駄に高く積み過ぎて、それが倒壊した…………。めんどうかいから適当にかき集めたが…………）

火「妙にボロボロの古臭いノートだ。」

冬「…………覚えがない。」

夏「…………そのノートなら、俺も宗治も見てるよ。」

冬「蒼麻…………。」

夏「ありがとう、もう大丈夫だよ。」

火「…………それで夏希、そのノートってのは灰色の表紙の…………？」

夏「はい。倒壊した山を、宗治が片付ける時に、宗治が投げたのを、拾つたのを少し読んだんで、たぶんそれだと思います。」

火「冬木、お前中身は？」

冬「やつさと片付けたいからと思つて片つ端から投げ飛ばしたいから、見てないな。それらしいもんも、他の本も。」

火「まあ、片づけに集中してたつつう事だから文句も言えないな。ふむ、中身見てなくても、関係ない様だな……。」

冬「その日記が今回のに関係してゐる可能性は？」

火「内容は見てる。高い確率でそれだ。その前に、蓮ちゃん達に確

認取るか…………。」

夏「そうですね…………。」「

冬「手がかりそれしか無いしな。」「

秋「…………古い灰色のノート?」

火「正確には日記帳だがな。」「

上「あー…………なんか見た様な、つか中身見たかも。」「

秋「あたしは中身見てないけど、たぶんそれは触ったかも…………。」「

冬「たぶん全員触るか中身見るかはしてるって訳か。」「

夏「そうなるね。」

冬「なあ、その中身ってのはどんな内容なんだ?」

夏「ああ、俺も全部見た訳じゃないから、詳しくは説明出来ないかな……。」

火「なら、そいつは俺が説明しよう。中身は全部読んでるからな。」

冬「助かるわ。」

火「簡単に挿い摘んで説明するか。いいか、あの日記の中身は……」

第1-9話・偽りの終焉③

火「簡単に描い摘んで説明するか。いいが、あの日記の中身は……」

冬（その内容は、俺達が驚く物だつた。）

冬（日記の持ち主は、30年以上も前のこの学校の女子生徒で、旧校舎の火災に巻き込まれ、死んだらしい。その生徒はいつも1人でいた。仲間を作る事が苦手だった彼女は、努力をするもそれが叶う事はなく1人でいざるを得なかつた。）

冬（そんな中、彼女はある日、当時存在した園芸部に入部した。だが、そこで彼女は、ある男子生徒と出会つた。その男子生徒だけは、彼女と友達になりたい…………そう言って、彼女の初めての仲間は出来た。）

冬（彼女は何よりもそれを喜び、そして自分からも、もつと他の誰かと向き合い、居場所を増やそうとした、その矢先だつた。）

冬（火災事故が発生し、彼女は逃げ遅れ、そのまま命を落とした。）

火「…………この子は、いつも日記に持ち歩いていただわな。ここまで記録してあるんだから…………。」

上「なあ、火野先生。なんでその日記だけ残つたのかな？学校全体の火事なら、そんなノートなんて…………」

火「たしかに、普通なら燃えるだろうな。わからんな…………何故、日記だけは無事に残つていたのか」

秋「他の誰かが持つてたのかな…………じゃなきゃ、日記だけ外に放り出したのか…………」

冬「前者はともかく、後者は何でそうしたのか…………、助けのサインでも書いて外に出したのか…………」

上「それなら、外に向かつて叫ぶなり、最悪飛び降りるなりしない？」

冬「それもそうだ……。そういうや火野さん、いつ田記の中身なんて呼んだんだ?」

火「資料室だよ。台本のダンボールの中に一緒に入つてたのを見つけて、何なんか気になつて全部読んだんだよ。」

冬「火事つてのも、田記に?」

火「ああ。おかしいんだよな…………。逃げられない状況下でそんなもの悠長に書く余裕なんてあんのか?」

冬「考えれば考える程謎だな…………。火野さん、田記は資料室にあるのか?」

火「こっちの校舎にあるかは分からぬが、そうだ。」

冬「あるかは分からぬ…………だが、他に手掛かりも無い訳だし、仕方ない…………。」

冬「資料室へ、その田記を探しに行つてみよう。何か、他にも解るかもしけないしな。」

第20話・偽りの終焉4

冬「資料室へ、その日記を探しに行つてみよう。何か、他にも解るかもしれないしな。」

別館2階 資料室前

冬「あの女は…………来てないな。」

夏「うん、別館に逃げてからは遭遇してないね。」

冬「俺は結構、最初本館の中でうひつき回つてたが見ていないし……、そういうや火野さん。」

火「ん、何だ?」

冬「火野さんは俺達に遭遇する前…………、別館にいる時はあいつは

見てないのか？」

火「ああ、見てないな。ここで最初に人を見たのは、お前達だし。」

冬「そうか……、一応聞くが蒼麻と上山は？」

夏「見てないよ。」

上「俺もだよ。」

冬「先輩は部室出てから遭遇したんだよな？」

秋「うん、そうよ。」

冬「ふむ……つう事は本館にいた俺達は運が良かつたのか？」

秋「そりゃない？」

冬「そうだ、まだ正体の解つてない、いるかもしれない誰か、コイツには先輩も遭遇してない？」

秋「うん、それは私も分からぬ。」

冬「もしこっちサイドの人間なら早いとこ合流したいわな……。」

夏「なあ、あんまり外に居すぎて、もしいきなり来られたりしたらアレだしだ……。」

冬「あ、ああ、そうだな……、中に入っちゃつか。」

ガラララララ

? 「……………。」

冬「……………。」

ガララ、ピシヤツ

冬「みんな、資料室は後回しにしよ……………」

ガラララララ、ガシツ

? 「見ないフリなんて、酷い子ね、冬木君?」

冬「……何でアンタまでいるんですか? 董さん……………」

夏「やつぱり姉さんだったのかつ？」

夏希董「蒼船まで」んな変な所に閉じ込められてたのね……」

秋「アンタね……非常ベル鳴らしたのつて……。」

董「おかげで助かったでしょ？」

上「董先輩いなきや、俺達強行突破確定だつたしね……。」

火「まあな……董ちゃんは追いかけられた時大丈夫なのかい？」

董「私はすぐ逃げちゃいましたし、どうにか……」

冬「…………董さんは、田記見たんですか？」

董「…………田記？」

冬「灰色のボロいノートの…………。」

董「ああ…………あれね。」

夏「いつ読んだの？」

董「部室の掃除始める前よ。誰のかな?つて。」

冬「触りなきや、俺達こんなとこに居なかつたんだよな……。」

董「何の話かしら?」

冬「実^{アキ}な^{シテ}。」

冬「…………つて頭です。」

董「ふうん……。で、あるかどつかも分からぬ手がかりにならうな口^{ハグ}を探してゐ、と。」

冬「あ、探さなこよつマシかな…………と。」

董「な、ひ、」

ガリガリワッ

董「早く見つけましょ？」

第21話・偽りの終焉5

董「なら……早く見つけましょ？」

秋「…………これは、違う、と。」

夏「…………うわ、こんな古い本まであるんだ。次の文化祭の出し物で使えないかな…………。」

上「今そんな場合じゃないだろ、って、これエッチい本…………じゃねえでやんの…………。」

ガンッ！

上「いてえつー！？」

火「真面目に探し、馬鹿者。」

冬「…………。」

董「中々見つからぬわね…………。冬木君は見つけたかしら?」

冬「いえ、いつも見つかんないです…………。」

上「…………。」

夏「上ヨ、わいわい探せ…………つて、どうした? そんな宗治なんか見つめて。」

上「いや…………、冬木って董先輩にだけはなんで敬語なんだろって…………。」

火「それは俺もちょい氣になるわな。俺にもタメ口だし…………」

夏「ああ、それは…………。」

上「まさか、冬木って董先輩の事がす…………。」

スカーンツー

上「あだつ?...」

冬「べつだらねえ事ほざこじる暇あんなら手元動かせつ、タコ?...」

上「すんませんつー?」

上「くそ、何で俺だけ……」

夏「そりや、別に宗治は姉さんの事が好きって訳じゃないから。」

火「違うのか?」

夏「姉さんは、小さい時に宗治の事も弟みたいに可愛がってたから、姉みたいに思つてるだけみたいです。」

上「お前らそんな付き合い長いの?」

夏「幼稚園の頃からの付き合いだし、ね。」

火「董ちやんは昔から冬木の事は『冬木君』って呼んでたのかい?」

夏「昔は普通に名前で呼んでたんですけど、宗治がなんか恥ずかしいからって名字で呼んでくれって懇願し出したんですよ。」

火「何でまた……。」

夏「小学校はともかく……、いくら言つても『宗ちゃん』って呼ばれんだんだん辛くなつたみたいで……。」

上「ふへへへ……宗ちゃんつて……。」

ズドンツ!!

上「広辞苑?...」

冬「.....。」

上「ひ、ひいいいつ!-?」

董「危ないから駄目よ、冬木君。」

冬「.....了解。」

夏「.....今の呼び方になる過程で、なんか敬語になつてて。」

火「.....そうか。」

夏「どうこう訳か、別に姉さんも納得しちゃって、何か言う事も無いんですよ。」

火「冬木も人の子だな.....。」

第22話・偽りの終焉6

火「冬木も人の子だな……。」

冬「…………。」

冬（自分の酷さなんてのは直覚してると言えども…………、あのオッサンはなんて言い方しやがる。）

董「どうしたの、冬木君？」

冬「いや、何でもないです…………。」

董「あら、凄いしかめつ面して、そんな事いつのかしづく。」

冬「うべ…………。」

董「それにしても、火野先生にも困った物ね…………。」

冬「…………まあ、仕方ないとは思つんですけどね。資料整理で片付けてたんすから、じいじの日記があるか忘れたってのは…………。」

冬（突つ込まれたくないことに気が触れなってのが本当に董看見る
しいわな……。）

董「えうね……。仕方ないのかしらね……。」

冬「董ちゃんが、やつぱつこの状況は嫌ですか？」

董「当たつ前じやなこ。逃げられる時に困られるならともかく、閉じ込められるのはいやなんよ。」

冬「な、ひ、いやひひひと探してしまこますか。何時までもいいなどいじましたくないですし……。」

董「ええ、だからしつかり探しもします。」

冬「言われなくとも……。」

冬（董やことのやつ取りかい、俺達は黙々と四つの物の搜索にかかる
つた。）

冬（やじり、少しきしてからある壁を這いついて事になつたのだった。
…。）

冬「…………これも違う、か…………。」

冬（似た様な品は出でくるが、やっぱり簡単には出でくる訳ないか
…………）

冬（そもそも、あるかどうか分かんないしな…………。）

火「冬木、蓮ちゃんを知らないか。」

冬「は？ 蓮先輩ならそいつの棚で探してんじゃ…………」

夏「いないんだよ。」

董「火野先生、他の場所にはいないの？」

火「他の棚を調べてるかと思つてちょっと見回してみたが、そういうらしい。」

冬「…………トイレか？」

上「でも、俺達誰も資料室のドア開ける音聞いてないぜ。」

夏「それ以前に、外危ないのに出るとは思えないし……。」

冬「そうだよな…………。無いとは思つが、どうか隠れてるか見て
みるか……。」

火「いくら蓮ちゃんもイタズラ好きだからってそれは…………。」

冬「本当にやつてたらひっぱたきもんだな。」

董「じゃあ、捗しましょ。いなければ、そっちの方が問題よ。」

冬「ロッカーん中も、机の下もダンボールの中も本棚の影にもいな
い…………。隠れられる場所はもう無いから、こうなるともう外か
い…………。」

夏「でも何で……？」

冬「俺が聞きたいわ……。」

火「仕方ない、携帯で連絡してみるか。流石に状況がな……。」

上「もし隠れてたりしてる時とかだったらまずいけど……」

ピッ

火「……。」

冬「無事でいてくれよ……。」

火「……？」

ピッ、ピッ

火「……」

冬「……火野さん？」

火「.....」

董「火野先生つ。」

火「.....」

火「おかしい.....。」

夏「？」

火「蓮ちゃんの携帯に繋がらない.....。」

第23話・偽りの終焉

火「蓮ちゃんの携帯に繋がらない…………。」

夏「なつー?」

冬「…………。」

上「嘘だろ…………。」

董「先生、携帯を…………。」

火「…………。」

董「…………。」

董「呼び出し音すら鳴らないわ…………。」

上「えいこうりん…………」

冬「先輩、 いきなり消えたのかもな…………。」

夏「いきなりつて?」

冬「だから、 何の前触れもなく、 本人も解らない内に、 だ。
上「どうやってだよ、 そんないきなりだなんて…………。」

冬「分からぬ。 ただ…………。」

冬「俺達の内誰か、 こここの扉開ける音なんて聴いたか? 少なくとも、
俺は一つも聴いてない。」

夏「確かに…………、 聽いてない。」

上「俺も、 確かに…………」

董「私もよ。」

冬「火野さん、あなたは？」

火「確かに、聴いてないな。」

冬「となると、その考え方で良いかもな。」

上「でもよ、一体何処にいったんだよ…………。」「

冬「それも分からぬ。ただ、少なくともまつは想いつく。その前に…………」

ピッ、ピッ

夏希董

ピッ

ピココココココココ

董「じゃあ、」

ピッ

冬「やっぱ3つだな、思ひ浮かぶなら…………。」「

董「冬木君、何なの？」

冬「…………失礼。気になつたもんすから…………、まあ可能性一つ田。

「

冬「元の居るべき場所に戻ってしまった。」

夏「戻った、先輩だけ?」

冬「ああ、蒼麻は俺達がここに最初来てから取つた行動は覚えてるな。」

夏「……ああ、誰に連絡が着くか、って…。」

冬「そう、俺達はそれでこの校舎内にいる人間と、そうでない奴らの特定が出来た。」

夏「それで先輩が元の世界に戻ったって……？」

冬「あくまで可能性だがな。できれば、そうであつてほしいっちゃほしいが……さて、2つ目。あの女に捕まつてしまつたか……。」

「

上「……。」

冬「ただ、先輩が自分で出た、もしくは、あいつがここに入ってきた形跡が無いとなると、その可能性は〇に近い。」

火「どうしてそう思う?」

冬「前者の場合、仮に先輩が出てつたとしたなら、誰も先輩が出てつたのに気づかないなんてのは、いくら何でも無いだろ。後者にしたつて、それなら先輩一人だけ狙うなんて必要がない。」

火「まあ、そりゃそうだわな……。」

冬「さて、最後の可能性……。一番考えたくない可能性だ。」

冬「先輩が消滅したといつ可能性。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348x/>

閉ざされた校舎(ほぼ台詞のみ)

2011年11月17日19時36分発行